

## 20 世紀初頭のフィリピン南部における鳥類収集 ——新種の発見と命名をめぐる

伊東 剛史

### はじめに

19 世紀末から 20 世紀初頭、東南アジアの島嶼部、および琉球諸島、台湾諸島、ニューギニア島とその周縁の島々は、鳥類学にとって新種発見のフロンティアであった。欧米から訪れた採集家は、先を競って未記載種を発見しようとした。そして多くの鳥が捕獲され、その剥製が欧米諸国の博物館やコレクターのもとに送られた。未記載種であった場合は、その記載論文によって学名 (scientific name) が定められた。

動植物の分類命名法は生物学史の領域を超えて、幅広い学術的関心を寄せられてきた。フーコーがかつて『言葉と物』で論じたように、属名と種小名の二語によって動植物を統一的に分類命名する技法は、啓蒙期ヨーロッパに現れた近代的な知の体系と技法を、確かに体現するものだったと言える<sup>1</sup>。また、分類命名法の発展をもたらした動植物採集とその背後にある帝国主義的イデオロギーも、科学史研究の重要な研究テーマとして取り組まれてきた。たとえば、18 世紀イギリスのジョセフ・バンクスと「プラント・ハンター」と呼ばれた植物採集家については、十分な研究蓄積がある<sup>2</sup>。しかし、大規模な採集活動が繰り返され、新種記載が飽和状態に達した 19~20 世紀転換期に、実際にどのように動植物が採集されたのか、そして、それがどのように科学知を生み出したのかについては、未だ全体像が得られていない<sup>3</sup>。まずは、実証的なケーススタディーの蓄積が求められる状況にある<sup>4</sup>。

こうした研究動向に鑑み本稿は、1890 年代から 20 世紀前半にかけてフィリピン諸島南部の

---

本稿は、2019 年度専修大学人文科学研究所総合研究調査、および JSPS 科研費 (課題番号 17KK0021; 17KT0031; 20H01333) による研究成果の一部である。

<sup>1</sup> ミシェル・フーコー (渡辺一民、佐々木明訳『言葉と物—人文科学の考古学』(新潮社、1977 年) 第 5 章。

<sup>2</sup> たとえば、D. P. Miller (ed.), *Visions of empire: voyages, botany and representations of nature* (Cambridge: Cambridge UP, 1996); Richard Drayton, *Nature's government: science, imperial Britain, and the 'improvement' of the world* (New Haven: Yale UP, 2000)。

<sup>3</sup> 西川輝昭「命名法上のタイプ概念、タイプ化の原理、および標本登録システムに関する歴史的考察」『タクサ』45 (2018) 33-47。

<sup>4</sup> Robert E. Kohler, *All creatures: naturalists, collectors, and biodiversity, 1850-1950* (Princeton: Princeton UP, 2006); Daniel E. Bender, *The animal game: searching for wildness at the American zoo* (Cambridge, MA: 2016), ch. 2. 他には、動物採集ではなく、測量や地理学的調査が目的の遠征だが、カビル・ラジ (水谷智、水井万里子、大澤広晃訳)『近代科学のリロケーション——南アジアとヨーロッパにおける知の循環と構築』(名古屋大学出版会、2016 年) 第 6 章「旅人が機器になるとき」も、重要な研究事例である。

島々、とりわけミンダナオ島で行われた鳥類採集に着目し、新種記載をめぐる鳥類学の展開を分析する。これには、次のような学術的意義がある。最初に、分類命名法の歴史にとっての意義である。すでに19世紀半ばには、イギリス科学振興協会 (British Association for the Advancement of Science) によって、分類命名法の原則を明文化する試みが始まっていたが、19世紀後半には国際的な合意形成の必要が高まり、第5回国際動物学会議 (ベルリン) によって採択された規約が、1905年に英仏独語で出版された<sup>5</sup>。この規約はその後改定を重ね、今日まで動物の分類命名法を定めてきた。こうした動向の背景には、本稿でとりあげるフィリピン諸島南部など、世界の未探索地域における動物収集と、とりわけ新種の発見・記載をめぐる国際的競争があった<sup>6</sup>。したがって、本稿は動物命名法の国際標準化を、動物採集の実態という側面から捉えなおすことに寄与する。

次に、これに関連する本研究のもうひとつの意義は、この動物収集の実態を微視的視点から明らかにする点である。とくに、「帝国と科学」をテーマとする先行研究においては、例えばイギリスとインドのように欧米諸国とその植民地の間に、科学者、自然物 (標本など)、知識・情報が行き交うネットワークが形成されたことが明らかになっている<sup>7</sup>。本稿は、そうした研究に対し、科学のネットワークを稼働させる動力源は一体何だったのかを改めて問う。とくに、動物の分類命名における「献名」という慣習に着目し、動物学者や採集家の情動的側面から、新種の発見と命名の重要性を分析する。それにより、帝国と科学の関係を支配者・被支配者の二項対立や、科学と帝国主義のレトリックへと安易に還元せず、両者を架橋した当事者の視点から理解することを目指す。

さらに本研究には、鳥類学史の事例研究としての意義もある。20世紀初頭には、米比戦争によりフィリピンに侵攻したアメリカはモロ (東南アジアのイスラム化の過程でムスリムとなった人々) の制圧をはかり、モロの拠点であるミンダナオ島やスルー諸島を統治機構の中に組み込んだ。それにより、これらの地域での資源探査や生物地理学的調査がアメリカ人科学者によって進められた。鳥類学研究に関しても、アメリカが主導権を握るようになった。その過渡期にあって、英米の鳥類学者の間に競争が生じたことも、この時期に数多くの新種が登録された理由のひとつである。こうした歴史的背景をふまえたうえで、本稿は新種の発見から記載までの過程を実証的に明らかにする。

---

<sup>5</sup> Harriet Ritvo, 'Zoological nomenclature and the empire of Victorian science', in Bernard Lightman (ed.), *Victorian science in context* (Chicago: Chicago UP, 1997), pp. 334–53; International Committee on Zoological Nomenclature (ed.), *International code of zoological nomenclature*, 4th ed. (London: International Trust for Zoological Nomenclature, 1999), pp. xxi–xxii.

<sup>6</sup> Jorei Witteveen, 'Suppressing synonymy with a homonym: the emergence of the nomenclatural type concept in nineteenth-century natural history' *Journal of the History of Biology*, 49 (2016) 135–189.

<sup>7</sup> 代表的研究として、ラジ『近代科学のリロケーション』。

本稿が依拠する史料には、刊行史料と未刊行史料がある。前者は、新種の記載論文や採集者のフィールドノートが掲載された鳥類学の専門誌である。具体的には、1857年設立のイギリス鳥類学者連合 (British Ornithologists' Union) が刊行する『アイビス』 (*Ibis*) と、この連合を母体として1892年に発足したイギリス鳥類学者クラブ (British Ornithologists' Club) の『イギリス鳥類学者クラブ紀要』 (*Bulletin of the British Ornithologists' Club*)、そして『ワシントン生物学会紀要』 (*Proceedings of the Biological Society of Washington*) である。次に未刊行史料には、ロンドン自然史博物館に収められた採集家の書簡がある。そこには本稿の主要な分析対象である、イギリス人採集家ウォルター・グッドフェローが、ロンドン自然史博物館の鳥類学者ウィリアム・オグルヴィー＝グラントや、トリング動物学博物館の鳥類学者エルンスト・ハータートへと送った書簡などが収められている。また、スミソニアン博物館は「フィールドブック・コレクション・プロジェクト」と呼ばれる、未刊行史料のデジタル化を推進しており、そこに本稿がとりあげるもうひとりの採集家、エドガー・マーンズの史料が収められている。これらの未刊行史料からは採集活動の実態だけでなく、採集家と研究者との間の複雑な関係が見えてくる。さらに、未刊行史料と刊行史料とを比較参照することで、新種の発見から記載に至るまでの一連の過程が判明する。フィールドで得られる知識や情報が、いかに特定の形式に則り編纂され、科学知として再構築されたのかが分かるだろう。それは、知識とその創出過程の標準化 (standardization)、そしてそれらのグローバル史という文脈に位置づけられる。

なお、フィールドで採集活動を行う者も、そうした採集家から入手した標本をコレクションする者も、どちらもコレクター (collector) と呼ぶうる。実際に、必ずしも両者は完全に分離していたわけではなく、ロスチャイルドのように莫大な標本コレクションを所有する一方、自ら採集遠征に向かう者もいた。ただし本稿では、曖昧さを避けるため、とくに前者のコレクターの意味で「採集家」という言葉を用いる。また、鳥類の分類や学名については、現在でも鳥類学者の間で議論が分かれる鳥種も少なくない。本稿は、鳥類採集と分類命名を同時代的文脈において理解することを目的とするため、現在の状況には立ち入らない。本稿で扱う鳥種の記載時の学名と、現在の学名、英名、和名との照合については、オンラインリソースである *Avibase: The World Bird Database* に依拠する<sup>8</sup>。

---

<sup>8</sup> <https://avibase.bsc-eoc.org/avibase.jsp> 本稿が扱う記載時の学名には、今日まで学名として有効であるもの、その後目録改訂等により別の学名が用いられるようになり、**protonym** (原記載時の学名) として扱われているもの、また既記載種であったためシノニムとして扱われているものがある。献名によって命名された鳥種については、Bo Beolens, Michael Watkins and Michael Grayson, *The Eponym Dictionary of Birds* (London: Bloomsbury, 2014).

## 1. グッドフェローの第1回アポ山遠征

19～20世紀転換期の『アイビス』や『イギリス鳥類学者クラブ紀要』には、この時期の鳥類学研究を支えた多くの採集家の存在が示されている。研究者に標本を提供する採集家の中には、動物収集を生計の手段にする者と、別に本業を持つ者がいた。本稿がとりあげるウォルター・グッドフェローは、前者にあたる。グッドフェローの名前は、その名を冠したいくつかの鳥種の学名に残っている。また、台湾の固有種であるミカドキジ (*Syrmaticus mikado* Oglvie-Grant, 1906) の「発見者」としても知られる<sup>9</sup>。しかし、『オックスフォード英国人名辞典』(*Oxford Dictionary of National Biography*) には掲載されておらず、とくに初期のキャリアについては確かな情報が少ない<sup>10</sup>。自然史博物館の史料から判明していることは、1897年11月頃、グッドフェローがトリング博物館に手紙を送り、その所有者のウォルター・ロスチャイルドに支援を求めたことである<sup>11</sup>。グッドフェローはすでに東インド諸島での動物収集の経験があること、新種発見の可能性が高いセレバス島(スラウェシ島)内陸部の探索を計画していること、しかし同時に、ロスチャイルドの依頼であればどこにでも採集に赴く意思があることを記している。ロスチャイルドは、ロンドン・ロスチャイルド家の嫡男であったが、銀行業や政治には興味を示さず、動物学研究とそのためのコレクション形成に傾注した人物である。ハートフォードシャーのトリングに動物学博物館(以下、トリング博物館)を建設して、1892年にそれを一般公開した。ロスチャイルドは巨額の資金を投じて、世界各地から標本を収集した。とくに鳥類学のコレクションに限れば、トリング博物館はロンドン自然史博物館に匹敵する規模を誇った。コレクション形成には、多くの採集家が携わっており、グッドフェローもそこにチャンスを見いだしたと考えられる<sup>12</sup>。

グッドフェローが得た返事の内容や、そもそも返事を得たのかについては、該当する史料が未発見のため分からない。しかし、直後の1898年、グッドフェローはクロード・ハミルトンとエクアドルへ向かった。鳥類採集を目的とした遠征であった。遠征は成功裡に終わり、グッドフェローの採集家としてのキャリアが大きく開かれた。1900年2月、イギリス帰国直後のグッ

<sup>9</sup> 伊東剛史「ミカドキジの命名、採集、および保全繁殖の歴史に関する基礎研究」『専修大学人文科学研究月報』300号(2019年)27-48。

<sup>10</sup> グッドフェローは1953年に死去した。その2年後、動物学者、著述家、テレビ・プレゼンターとして活躍したデイヴィッド・セス＝スミスによる追悼記事が、『飼鳥雑誌』に掲載された。ただし、鳥類採集家として有名になる以前のことについては記述がなく、台湾探検とミカドキジ発見の年も誤っている。*Avicultural Magazine*, 61 (1955) 33-34。

<sup>11</sup> Natural History Museum, London (subsequently NHML), TM/1/27/12, Walter Goodfellow to [Walter Rothschild], 30 Nov. 1897.

<sup>12</sup> Miriam Rothschild, *Walter Rothschild: the man, the museum and the menagerie* (London: Natural History Museum London, 1983), pp. 154-184.

ドフェローは、ハミルトンとともに鳥類学クラブの会合に招かれた。そして、そこに集まった著名な鳥類学者たちに囲まれ、ふたりの成功が顕彰された<sup>13</sup>。その場にはロスチャイルド本人と、トリング動物学博物館の鳥類学キュレーターを務めるエルンスト・ハータート、およびロンドン自然史博物館の鳥類学者ウィリアム・オグルヴィー＝グラントも参列していた。その後、グッドフェローは、収集した約 554 種 4000 点の標本についての報告をまとめ、『アイビス』に掲載した<sup>14</sup>。なおこの報告には、アメリカ国立自然史博物館（スミソニアン博物館）に売却されたハチドリは含まれていなかった。その目録を作成したハリー・オーバーホルザーによれば、109 種（亜種を含む）1136 点のハチドリ・コレクションは、トリング博物館を除けば、「おそらく最も素晴らしい単一コレクション」であった<sup>15</sup>。このことも、グッドフェローの採集家としての知名度を高めたと考えられる。

その後グッドフェローは、飼鳥家 (aviculturist) のエドワード・ジェイムズ・ジョンストン、マリオン・ジョンストン夫妻の知己を得た。ジョンストン夫妻は、サフォーク州ベリ・セント・エドマンズに飼鳥園を所有し、希少種の飼育繁殖を行っていた<sup>16</sup>。とくにマリオン・ジョンストンは、飼鳥会 (Avicultural Society) の理事を務め、協会刊行の『飼鳥雑誌』に度々寄稿していた。このふたりの依頼により、1902 年、グッドフェローはフィリピン南部のミンダナオ島に遠征した (図 1)。ルソン島経由でミンダナオ島に到着すると、翌年 1 月、ダバオからアポ山へと

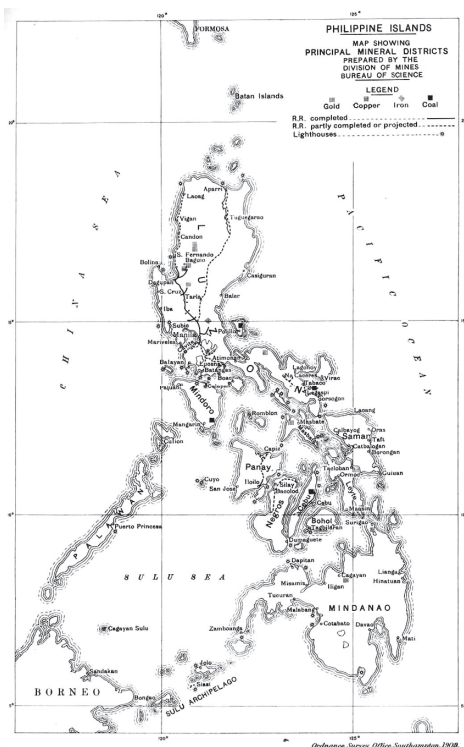


図 1：フィリピン諸島 1909 年

出典：Perry-Castañeda Library Map Collection Historical Maps of Asia, University of Texas Libraries, [https://legacy.lib.utexas.edu/maps/historical/history\\_asia.html](https://legacy.lib.utexas.edu/maps/historical/history_asia.html), last accessed 20 May 2020.

<sup>13</sup> *Bulletin of the British Ornithologists' Club* (subsequently, *BBOC*), 10 (1900) 63–64. その後、グッドフェローは鳥類学クラブへの加入が認められた。

<sup>14</sup> Walter Goodfellow, 'Results of an ornithological journey through Colombia and Ecuador', *Ibis*, 8th ser., vol. 1 (1901) 300–319, 458–480, 699–714; 2 (1902) 59–66, 207–232.

<sup>15</sup> *Ibis*, 8th ser., vol. 2 (1902) 668. Harry C. Oberholser, 'Catalogue of a collection of humming-birds from Ecuador and Colombia', *Proceedings of United States National Museum* 24, (1902) 309–342.

<sup>16</sup> 伊東剛史「ミカドキジの命名、採集、および保全繁殖の歴史に関する基礎研究」37–38。

表 1：グッドフエローが発見しハーターが命名したアポ山の新種鳥類の一覧

No.	記載時の学名 (1)	新種・新亜種 (2)	英名 (3)	和名 (3)	現在の学名 (3)	備考
1	<i>Trichoglossus johnstoniae</i> , Hartert	新種	Mindanao Lorikeet	アホイコ	<i>Trichoglossus johnstoniae</i> Hartert, 1903	
2	<i>Goodfellowia miranda</i> , Hartert	新属新種	Apo Myna	アポオオサマムクドリ	<i>Goodfellowia miranda</i> Hartert, 1903	
3	<i>Rhipidura nigrocinnamomea</i> , Hartert	新種	Black-and-cinnamon Fantail	ムナグロオウギビタキ	<i>Rhipidura nigrocinnamomea</i> Hartert, 1903	
4	<i>Cryptolopha mindanensis</i> , Hartert	新種	Negros Leaf-Warbler (mindanensis)	ミナミムシクイ (nigrorum グループ)	<i>Seicurus nigrorum mindanensis</i> Hartert, 1903	
5	<i>Hypocryptadius cinnamomeus</i> , Hartert	新種	Cinnamon Ibon	ニッケイメジロ	<i>Hypocryptadius cinnamomeus</i> Hartert, 1903	
6	<i>Zosterops goodfellowi</i> , Hartert	新種	Black-masked White-eye	ホオグロメジロ	<i>Heleia goodfellowi</i> Hartert, 1903	
7	<i>Zosterops whiteheadi</i> , Hartert	新種	Mountain White-eye (whiteheadi)	ヤマメジロ	<i>Zosterops montanus whiteheadi</i> Hartert, 1903	発見者は、John Whitehead (4)
8	<i>Zosterops whiteheadi vulcani</i> , Hartert	新亜種	Mountain White-eye (vulcani)	ヤマメジロ	<i>Zosterops montanus vulcani</i> Hartert, 1903	

出典：Bulletin of the British Ornithologists' Club, 14 (1903) 10-13.

注：(1) 論文刊行時に記載された学名。

(2) 発表時点での分類による。

(3) 英名、和名、現在の学名および発表時の学名との照合確認は、Avibase: The World Bird Database に依拠する。和名と英名は、主にタイプ種のもの。発表当時は種に分類されていたものの、現在は亜種であるものが多い。

(4) John Whitehead (1860-1899)：探検家、採集家。1890 年代にフィリピン諸島を探検し、ミンダナオ島にも訪れ、多くの新種発見をもたらした。米西戦争によりフィリピンでの採集活動を断念し、その後海南で病死した。

向かった<sup>17</sup>。アポ山は、ダバオ市の南西に位置する標高約 3000 メートルの火山であり、またフィリピン諸島の最高峰である。19 世紀半ばから、スペイン、フランス、ドイツなどの探検隊が送られてきた。グッドフェローは、そのアポ山の約 2500 メートル付近で鳥類採集に従事したのである<sup>18</sup>。

グッドフェローの主な目的は生鳥の捕獲であったため、新種発見に専念することはできなかった。しかし、それでも未記載と思われる鳥が発見され、その標本がトリング博物館へと送られた。それを調査したハータートは、1903 年 10 月 21 日開催のイギリス鳥類学クラブ例会において、8 種（亜種を含む）の新種発見を報告した。その内容は、10 月 30 日発行の『イギリス鳥類学者クラブ紀要』に掲載された。表 1 はそこに記載された種・亜種の一覧である。記載時



図 2 アポオオサマムドリ  
*Goodfellowia miranda* Hartert, 1903

出典 : *Novitates Zoologicae*, 13 (1906) plate II.



図 3 アポインコ  
*Trichoglossus johnstoniae* Hartert, 1903

出典 : *Avicultural Magazine*, 4 (1905-6) 82.

<sup>17</sup> *Ibis*, 8th ser. vol. 3 (1903) 436-437.

<sup>18</sup> Miguel Dadera Maa, *Volcanoes and seismic centers of the Philippine archipelago* (Census of the Philippines Islands, vol. 3, 1904), p. 27; Miguel A. Bernard, 'The Ascent of Mount Apo: 1859-1958', *Philippine Studies* 7 (1959) 7-67.

の学名が、必ずしも現在そのまま使用されているわけではない。それは未記載と判断された鳥が、実は既記載であることが後に判明したり、目録の改定により種から亜種へと分類が見直されたりしたからである。

ハータートはアポオオサマムドリ (*Goodfellowia miranda* Hartert, 1903) とホオグロメジロ (*Heleia goodfellowi* Hartert, 1903) をグッドフェローに献名した (図 2)。とくに前者は新属新種であり、通常の新種発見より学術的価値が高いとされるものだった。なお、種小名の *miranda* は、「称賛に値する」という意味である。文字通り、この命名はグッドフェローを称賛する行為であった<sup>19</sup>。翌年 9 月に帰国したグッドフェローは、ハータートへの手紙で献名に対する感謝を簡潔に述べている。新種命名の際に発見者に献名することは科学者の間で一般的な慣習であった。ハータートに対するグッドフェローの感謝の言葉 (“Many thanks for kindly naming the birds for me”) は、両者の互酬関係を確認するプロトコルと解釈することができる<sup>20</sup>。

一方、ハータートはアポインコ (*Trichoglossus johnstoniae* Hartert, 1903) を、マリオン・ジョンストンに献名した (図 3)。そして、その理由をジョンストンが「飼鳥家として有名であり、とくにオウム目 [アポインコもオウム目である] の飼育繁殖に長けている」からだと説明した<sup>21</sup>。しかし、献名の理由はそれだけではないだろう。ジョンストンはグッドフェローのフィリピン遠征を資金面で援助し、ハータートもその恩恵を得ていたからである。ジョンストンもまた捕獲された鳥に関して、ハータートから専門的な知識を提供されていた。両者の間にも、互酬的な関係が形成されていたのである。

後にグッドフェローは『飼鳥雑誌』に寄稿し、ヒインコの一種であるアポインコを「発見」した経緯を次のように語っている。長文だが示唆に富む史料なので、直接引用することにする。

野営地から森林限界の地点まで登る途中、少し立ち止まり傾斜の先に行く御者を見上げた。そのとき近くで、確かにヒインコの囀りとわかる音がして驚いた。すぐにその音の出所を突き止めた。それは、植生が未発達場所にそびえ立つ巨木からであった。それを突き止めた瞬間、30 羽余の群れが飛び立ち、上空を旋回してから、再び巨木の頂の茂みの中へと戻った。日光が鳥の姿形を照らし出し、私は翼の裏側が黄色いことに気がついた。しかし、その鳥が一体何なのかは分からなかった。これは新種に違いないと確信したが、私の場所からではその木に近づく方法はなく、標本を入手することは不可能と思われた。翌日、私は再び同じ場所に向かうと、森林限界の手前でバガボ族の案内人が

<sup>19</sup> BBOC, 14 (1903) 11.

<sup>20</sup> NHML, TR1/1/25/176, Goodfellow to Hartert 28 Sept. 1904; Goodfellow to Hartert, 28 Oct. 1904.

<sup>21</sup> BBOC, 14 (1903) 11.



立ち止まった。頭上の茂みの中で鳥が数羽いるのを見つけ、それを指差したのである。私には何も見えなかったし、音も聞こえなかったが、ついに木の葉が揺れるのに気がついた。あたりは薄暗いために、何の鳥かを判別することはできなかった。私は銃をうったが、何も落ちてこなかった。しかし、木の頂から突然ヒインコの鳴き声が鳴り響いた。私はそれでもヒインコの姿を見ることはできなかったが、案内人の少年は確かに撃ち落とすと教えてくれた。とうとう私は木の根元にヒインコが引っかかっているのに気がつき、苦勞してそこからヒインコを取り出した。こうして、ようやくアポインコを手に入れたのである<sup>22</sup>。

以上を「語り」の観点から分析すると、まず冒険譚の要素があることに気がつく。熱帯気候の地域においてヨーロッパでも繁殖可能な鳥を探すということは、比較的冷涼な標高の高い山岳地域で採集することを意味する<sup>23</sup>。山岳地域での活動には、様々な制限と困難が伴った。そのため、命の危険を乗り越えて新種を発見するというのが、動物採集家が主人公の冒険譚の定型である。もちろん、そうした話の展開は独創的なものではなく、啓蒙期の探検記にまで遡ることができる。あるいは、この頃には書籍ジャンルのひとつとして定着していた狩猟記とも、共通する点がある<sup>24</sup>。一方、そうした探検記、狩猟記と採集記との違いは、言うまでもなく採集記は新種発見に最も重要な価値を置く点である。そのことは鳥の翼を一目見て、それがすぐに新種と分かったというグッドフェローの叙述にもあらわれている。身体的能力だけでなく、標本採集に不可欠な専門知識と技術を有する人物が、ここに描かれている。

さらに、この文章には現地の協力者の重要性も示されている。実際に現地協力者の情報提供なしには、採集活動を的確に実施することは不可能であった。野営地の設営を行ったり、物々交換によって食料を提供したり、あるいは採集家の手足となり耳目となって標本採集を手伝う現地協力者の役割は、非常に重要であった<sup>25</sup>。この時の採集活動がどれほどの規模だったのかは、残存する史料からは分からない。ミカドキジを発見した1905年の台湾遠征の時には、グッドフェローには原住民が採集活動に協力し、グッドフェローはその写真を撮っていた。そうした協力者を組織化し、効率的に運用する力もまた採集家に問われた<sup>26</sup>。この文章は、グッドフェ

<sup>22</sup> Walter Goodfellow, 'Notes on Mrs. Johnstone's lorikeet', *Avicultural Magazine*, 4 (1905-6) 84-85.

<sup>23</sup> Richard C. McGregor, 'Papers on Philippine birds II: the routine of a collector's work', *Cork* 8 (1906) 70-71.

<sup>24</sup> Takashi Ito, *London Zoo and the Victorians, 1828-1859* (Woodbridge: Boydell, 2014), pp. 147-148.

<sup>25</sup> たとえば、フィリピンヒメミフウズラ (*Turnix worcesteri* McGregor, 1904) は、マニラ近郊のフィリピン人採集家が発見した。このことも含めて、採集活動における現地協力者の役割については、フィリピン試験局 (1905年に科学局へと再編) で鳥類学研究を行っていたマクレガーの報告に詳しい。McGregor, 'Papers on Philippine birds II', 72.

<sup>26</sup> Takashi Ito, 'The naming of the mikado pheasant: ornithology, aviculture and zoogeography in the age of empires', paper presented at the biennial meeting of the International Society for the History, Philosophy and Social Studies

ローにその能力があったと読むことができるように書かれている。

この遠征でグッドフェローは、最後までアポインコの生鳥を入手することはできなかったが、そのチャンスが一度だけあったという。ミンダナオ島西部にあるコタバトから船に乗ったとき、乗り合わせたモロ（後述）の囚人に付き添う少年が、アポインコを持ち込んでいたのである。そこでグッドフェローは少年からアポインコを譲ってもらおうと交渉したが、少年は鳥を手放すことを頑なに拒み、最後にはグッドフェローが力づくで取り上げてしまうのではないかと恐れ、泣き出してしまったという。同船していたアメリカ人は、そうしてしまえばよいとグッドフェローに言ったが、グッドフェローは少年のアポインコへの愛情を尊重し、諦めたと記している。

このエピソードは、ミンダナオ島での鳥類採集活動が本格化した背景を示唆している。スペインによる植民地化が進行したセブ島、ルソン島などのフィリピン北部では、早い時期から博物学的調査が始まっていた。しかし、ミンダナオ島を含む南部では状況は全く異なっていた。米西戦争（1898年）後、アメリカがフィリピン南部の実効支配を進めたことによって、そのインフラを利用した採集活動が可能になったのである。しかし、植民地化を推進しようとするアメリカは、ムスリムの諸民族集団の頑強な抵抗にあい、イスラム勢力の掃討作成を行うことになった。グッドフェローは、まさにそうした紛争地域で採集活動を行っていた。そこで次節では、ミンダナオ島の当時の状況を整理しながら、掃討作戦に従軍しながら採集活動を行った採集家を取りあげる。

## 2. マーンズのアポ山遠征

14世紀後半、マレー半島より東部へと交易網を拡大したアラブ系商人がスールー諸島を訪れ、イスラム教を広めた。15世紀にはミンダナオ島にもイスラム教が伝わり、マレー半島からムスリムが移民してことで、さらにイスラム教が広まり、スールー王国などのイスラム王朝が成立した。16世紀には、ミンダナオ島南部にマギンダナオ王国が興り、最盛期を迎えた17世紀には全島を支配した。その後、スペインによるフィリピン諸島の植民地化が進行しても、ミンダナオ島の南部と西部では頑強な抵抗が続いた。19世紀後半に、ようやくスペインはミンダナオ島を支配下に置いたが、実態としてはコタバト（ミンダナオ島南西部の港町）や、ホロ島（ミンダナオ島とスールー諸島の間にある後者の島のひとつ）などに駐屯地を置いただけであり、実効支配にはほど遠かった。

1898年の米西戦争の結果、ミンダナオ島を手に入れたアメリカは、スールー諸島からミンダナオ島南西部を治めるスールー王国との間に、キラム・ベイツ条約を結んだ。それはムスリムの自治と信仰を保証する一方、同国をアメリカの軍政下に編入するという内容のものだった。こうして1899年10月30日に、スールー諸島とミンダナオ島の南部・西部からなる、「ミンダナオ島およびホロ島軍管区」が設置され、アメリカによるフィリピン南部のイスラム地域支配が公式に制度化された。そして、1903年、アメリカはモロ州を独立の軍管区として編成し、翌年にはムスリム指導者による条約の不履行を根拠としてキラム・ベイツ条約を破棄した<sup>27</sup>。こうしてモロ州ではごく少数の軍人のもとで、植民地主義政策が実行されることになり、支配に抵抗する一部モロの掃討作戦が進行した<sup>28</sup>。1898年から、モロ州が民政へと移行した1913年までの間のアメリカとモロとの武力紛争は、アメリカ史では「モロの反乱」と記録されている<sup>29</sup>。

アメリカによるミンダナオ島での鳥類採集は、この軍事作戦と同時並行で行われた。それを担ったのが、軍医としてアメリカ軍に参加していたエドガー・アレクサンダー・マーンズであった。1856年、ニューヨーク州のハイランドフォールズに生まれたマーンズは、早くから動物の収集と研究に関心を抱き、1881年に医学校を卒業して軍医になる一方、アメリカ国立自然史博物館（スミソニアン博物館）でも臨時の鳥類学キュレーターとして働いた。1890年代には、メキシコとの国境付近にあるエル・パソに軍医・自然史研究者として着任し、2年の赴任期間の間に30000以上の動植物標本を収集している。

軍医および採集家としての経験を積んだ後、マーンズは1903年から1907年までモロ州軍管区へと派遣された<sup>30</sup>。その在任中に、モロ掃討作戦に参加しながら、鳥類を中心とする動物標本

<sup>27</sup> アメリカのフィリピン統治と植民地主義との関係については、Paul A. Kramer, *The blood of government: race, empire, the United States, and the Philippines* (Chapel Hill: University of North Carolina UP, 2006)。とくに、フィリピン南部の統治については、Michael C. Hawkins, *Making Moros: imperial historicism and American military rule in the Philippines' Muslim south* (Dekalb: Northern Illinois UP, 2013)。なお、「モロ」はスペイン語によるムスリムの呼称に由来するが、アメリカの植民地政策でもその呼称が引き続き使用された、ムスリム系の諸民族集団の総称である。吉澤あすな「南部フィリピンにおけるムスリム-クリスチャン関係の歴史と言説—インターマリッジの理解に向けて—」『アジア・アフリカ地域研究』13-1 (2013) 29-30。

<sup>28</sup> 1906年にホロ島のダホ山で行われたタウスグ族の掃討戦では、女性と子供を含め約600人が虐殺されたため、アメリカ本国でもマーク・トウェインらから非難の声があがった。Michael C. Hawkins, 'Managing a massacre savagery, civility, and gender in Moro Province in the wake of Bud Dajo', *Philippine Studies*, 59 (2011) 83-105; Hunt Hawkins, 'Mark Twain's anti-imperialism', *American Literary Realism, 1870-1910*, 25 (1993) 37-38。

<sup>29</sup> Karine V. Walther, *Sacred interests: the United State and the Islamic World, 1821-1921* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2015)。Ch. 6 on 'Extending American colonial governance over Filipino Muslims, 1903-1920'。

<sup>30</sup> マーンズの略歴については、Keir B. Sterling, 'Mearns, Edgar Alexander', *American National Biography*, <https://doi.org/10.1093/anb/9780198606697.article.1301103>。なお、マーンズのフィリピンの赴任期間は確かに1903年からだが、スミソニアン博物館のオンライン史料「フィールドブック・コレクション」(Smithsonian Field Book Collection)に収められたEdgar Alexander Mearns Papers, 'Typescript copies of itineraries of Major Mearns in the Philippine Islands, June 17, 1902 - March 30, 1907', <https://doi.org/10.5962/bhl.title.161531>からは、マーンズがすでに1902年6月から7月にかけて、モロ州の州都サンボアングを起点とし、コトバタ、ダ

の収集に従事した。スミソニアン博物館のフィールドブック・コレクションには、マーンズの従軍旅程が記録された史料 ‘Typescript copies of itineraries of Major Mearns in the Philippine Islands, June 17, 1902 – March 30, 1907’ がある。この史料からは、軍事的遠征 (military campaign) と採集目的の遠征 (collecting campaign) とが明確に区別されないまま行われていたことがわかる。

1903年1月、マーンズはサンフランシスコを立ち、グアムを經由して7月26日にマニラに到着した。そして、翌月1日にバターン半島のマリベレスから、モロ州軍管区の本部が設置されたサンボアングに向かった。翌日、サンボアングに到着したマーンズは、11日に赴任先のパンター基地 (Camp Pantar) へ移動した<sup>31</sup>。ラナオ湖の北に位置するパンターは、3月に反抗勢力制圧のための基地が建設されたばかりであった<sup>32</sup>。基地に到着後、すぐにラナオ湖の敵対勢力を掃討する作戦に参加した。戦闘では14名のモロが死亡した。自身も3名をショットガンで殺害したと、マーンズは記録している。同年11月には、スールー島において兵士960人が投入された掃討作戦にも参加した。アメリカ兵にも犠牲者が出る一方、「数百人のモロが殺害され、多くの備蓄食料と何頭もの水牛と馬が鹵獲もしくは処分された」と記録されている<sup>33</sup>。このようにマーンズは、モロ州で掃討戦を繰り返すアメリカ軍に軍医として従軍しながら、機会が生じると銃をもって鳥類採集へと繰り返した。

1904年6月9日、マーンズはサンボアングからダバオへと出発し、6月17日から7月14日にかけて、アポ山で採集活動を行った<sup>34</sup>。アポ山では、前年にグッドフェローが調査を行っていたが、マーンズはこの遠征を軍事作戦とは独立した、アポ山の生物資源探査として実施した。アポ山での採集活動の構成員は表2である。このように現地協力者が明示されている史料は貴重である。まずマーンズ本人の他に、ケラーという名の兵卒 (後述) と、Fermain Goostah という名の随行者がいる。ダバオやアポ山に近いサンタクルスに在住との記載があり、母親がアポ山周縁に暮らすバゴボ族であることから、通訳であったと思われる。次の Tee-book-te と Tangee-lahn-o に英名があるのは、欧米人との接点があったからだろう。この遠征では、運搬人や料理人として雇用されていたと考えられる。メンバーには、さらにバゴボ族のガイドとその子ども (計3名) が加わった。小規模ながら山間部での採集活動において当時一般的な構

---

バオなど島内各地に遠征していたことが分かっている。以下、本稿ではこの史料を Itinerary of Major Mearns と表記する。

<sup>31</sup> Itineraries of Major Mearns, [f. 2].

<sup>32</sup> *Annual Reports of the War Department, 1903* (Washington: Government Printing Office, 1903), vol. 3. p. 398. なお、同基地は翌年には必要がなくなったとの理由から廃棄されている。*Annual Reports of the War Department, 1904*, vol. 3. p. 261.

<sup>33</sup> Itinerary of Major Mearns, [ff. 13–14].

<sup>34</sup> 行程としては、6月9日にサンボアングを出発し、12日に船でダバオに到着。14日にダバオを出発し、17日からアポ山での採集を開始した。9日に下山を開始し、復路においても採集活動を続けながら7月24日にサンボアングに帰着した。

表 2 : マーンズによるアポ山遠征のメンバー構成

氏名	記載事項
Edgar A. Mearns	軍医、少佐
Fletcher L. Keller	ダバオ駐在
Fermain Goostah	父親がヴィサヤ族、母親がボゴダ族の「メスチーソ」、左腕に「F. G」の焼き印、サンタクルス在住
Tee-book-te (Jim)	モロ 呼称 Jim
Tan-gee-lahn-e	モロ 呼称 Charley
Ong-ott	ボゴボ族、ガイド、50 歳
Mamel	ボゴボ族、ガイドの子、10 歳
Sah-doo	ボゴボ族、ガイドの子、12 歳
San-de	ボゴボ族、25 歳

出典 : Smithsonian Field Book Project, 'Typescript copies of itineraries of Major Mearns in the Philippine Islands, June 17, 1902 - March 30, 1907', [ff. 125-126] (<https://doi.org/10.5962/bhl.title.161531>).

成だったと思われる<sup>35</sup>。なお、キャンプ・グッドフェローという野営地の名称が記録に残っている。前年アポ山遠征を行ったグッドフェローが、拠点にした場所のことだろう。

マーンズのアポ山遠征に関する史料で興味深いのは、フィールドにおける採集活動から、記載論文が刊行されるまでの一連の過程を詳らかにしてくれる点である。マーンズは軍医であったことから、採集した標本を整理するために医療器具の在庫管理表を活用していた<sup>36</sup>。在庫管理表の左側には、鉗子、コットン、ガーゼ、絆創膏、手術針などの器具名が、縦に一列に並べられ印字されている。項目数は、1 ページあたり約 60 項目ほどである。その右側には、在庫の数などを手書きで記入できるように、一定間隔で縦に罫線が入った空欄が用意されている。マーンズはアポ山遠征から戻ると、この在庫管理表を用いて採集した標本を整理した。個体ごとに識別番号をふり、全個体について現地での呼称、雌雄の別、全長、翼開長（広げた両翼の先端から先端までの直線距離）、尾長などの測定値、採集地の標高、採集日を記載し、一部の個体については外形的な特徴について簡単なメモを加えた。これは、1883 年発足のアメリカ鳥類学者連合（アメリカ鳥学会）が定めた規則に則った作業であった<sup>37</sup>。この資料を分析の便宜上、史料 A と呼ぶことにする<sup>38</sup>。

<sup>35</sup> 1906 年 4 月、マーンズがマリندان山の包括的な地質学および生物地理学的調査（全行程 1 ヶ月の遠征）を企画した際には、大規模な遠征隊では食料・飲料水の確保が困難なため、軍医 1 名の他に、士官 1 名、兵卒 3 名、および運搬人 18 名、通訳 1 名、ガイド 1 名で十分だと記している。運搬人が多いのは、測量等に必要機材の運搬のためである。Itinerary of Major Mearns, [ff. 171-172].

<sup>36</sup> Smithsonian Field Book Project, Edgar Alexander Mearns Papers, Birds of Apo expedition, <https://doi.org/10.5962/bhl.title.160934>.

<sup>37</sup> Witteveen, 'Suppressing synonymy', pp. 146, 162; 西川「命名法上のタイプ概念」41-42。

<sup>38</sup> Birds of Apo expedition, [ff. 2-6].

その後、マーンズはこの資料をもとに、史料 A と同じ用紙を用いて、採集種の一覧を作成した。ここでは既記載種を除き、特徴を表現した簡易的な英語名（例として、*naked-headed sparrow*, *big-spotted hawk* など）を用いて分類作業を進めた。バゴボ名が判明している場合は、それも記載した。欄外には、各種の色を表すバゴボ語がまとめられている。この作業により、75 種の標本が採集されたことが判明した。そして次に、マーンズは種ごとの標本の数を集計した。この一覧でも、最初に英語で種名を記載し（インク）、その後同定作業をして学名を加えたようである（鉛筆）。それによると、最終的に 75 種 228 点が採集されたとわかった。ただし、その他に若干数の液浸標本もあると書き添えられている。これを史料 B と呼ぶことにする<sup>39</sup>。

史料 B の種の一覧は、さらに標高 2000 フィート以上で観察された種と、2000 フィート以上では観察されない種に区別され、アポ山の鳥類一覧が作成された（これを史料 C とする）<sup>40</sup>。この段階で、マーンズ自身の命名によるものも含めて、学名が先頭に記載され、その後に標本の識別番号が掲載された。この史料 C から未記載と思われる種を抽出したのが、「アポ山の鳥類のバゴボ名」という表題が添えられた史料 D である<sup>41</sup>。表題の下には、「以下の新種の鳥類のバゴボ名を活字にした」と書き添えられていることから、史料 D は後述する記載論文の刊行前後に作成されたと思われる。

以上の 4 種類の資料は現在ひとつにまとめられ、スミソニアン博物館の *Edgar Alexander Mearns Papers, 'Birds of Apo expedition'* のファイルに収められている。しかし、それぞれの資料がどの時期に作成されたのかは作成日の記載がないため分からない。ただし、史料 A には「8 月 13 日、この表に従いラベルを作成」と記載されているため、個々の標本の測定などがそれ以前に終了していたと考えられる。アポ山遠征が終了し、サンボアンガに帰還してから数週間後のことである。マーンズの従軍記録によると、この時マーンズは体調を崩し、マニラに移されていた。その後、マーンズはマニラの陸軍病院に入院し、さらにサンフランシスコの陸軍病院で治療を受けるため、9 月 15 日にマニラを発った。退院後は国立自然史博物館のあるワシントン D.C に移動した。従軍旅程には「その後冬期（1904～1905 年）をワシントンで過ごした。アメリカ国立自然史博物館の哺乳類と鳥類のコレクションの同定を行った」と明記されているため、史料 B はラベル作成とほぼ同時期にマニラで、史料 C と史料 D は、ワシントンで作成されたと考えられる<sup>42</sup>。

マーンズはワシントン滞在中、アメリカ農務省経済鳥類学課（*Office of Economic Biology*）のハリー・オーバーホルザーと、国立自然史博物館のチャールズ・リッチモンドの助けを得て標

<sup>39</sup> *Birds of Apo expedition*, [ff. 1, 7–8].

<sup>40</sup> *Birds of Apo expedition*, [ff. 9–17].

<sup>41</sup> *Birds of Apo expedition*, [f. 18].

<sup>42</sup> *Itinerary of Major Mearns*, [ff. 32–33].

本を分析し、『ワシントン生物学会紀要』の1月20日刊行号と2月21日刊行号において、新種の記載論文をそれぞれ1報ずつ発表した<sup>43</sup>。また、その間の2月11日には、ワシントン生物学会の例会において、「フィリピン諸島のアポ山の動物の生態」と題する報告を行った。哺乳類を扱ったこの報告は、「フィリピン諸島の哺乳類の新属および新種の記載」として『国立自然史博物館紀要』に掲載された<sup>44</sup>。

表3は、マーンズが『ワシントン生物学会紀要』で発表した新種の一覧である。一種(No. 18)を除き、マーンズ自身が採集したものである。この中で最も大きな「発見」とされたのが、アポチメドリ(No. 1)である。これは、単型属(その属に分類される種がひとつしかない属)と認められたため、種の上位の分類単位である属が新たに設定された。前述のアポオオサマムクドリ(*Goodfellowia miranda* Hartert, 1903)と同様に、新属新種の「発見」である。マーンズ自身が、この発見に特別な価値を置いていたことは、その命名からも分かる。新属新種の発見ということは、属名と種小名の二語を一度に作成することになる。そこでマーンズは、モロ州の軍政長官として自身の上官であり、またフィリピン科学協会(Philippine Scientific Association)の会長でもあったレナード・ウッド(Leonard Wood)を称え、これを*Leonardina woodi*と命名した。マーンズによると、フィリピン科学協会はマーンズがミンダナオ島に着任した1903年、フィリピン諸島の生物資源を調査すること、および標本を採集し国立自然史博物館のコレクションを拡充することを目的として設立された。マーンズはウッドと良好な関係を築いていた<sup>45</sup>。

このアポチメドリを例に、上記の史料群A~Dから新種の鳥類の採集から記載までの過程を再構成してみよう。史料Aによると、アポチメドリが採集されたのは7月11日である。マーンズは標本整理の際に、これに13689の識別番号をふった。アポ山で採集された鳥の最初の識別番号は13413(6月17日採集の標本)から始まり、13731(7月15日採集の標本)までである。なお、リストには、ダバオで採集された標本も含まれ、途中で数字を振り直した形跡があるので、開始番号と終了番号の差が、そのままアポ山で収集された標本数を示すわけではない。標本13689には、他の標本と同様に各種測定値とバゴボ名が記入されている。また、「脚と爪、鉛色」、「嘴、黒」とのメモも書き込まれている<sup>46</sup>。史料Bでは、同標本に‘All brown bird’という

<sup>43</sup> Edgar A. Mearns, ‘Descriptions of a new genus and eleven new species of Philippine birds’, *Proceedings of the Biological Society of Washington*, 18 (1905) 1–8; Edgard A. Mearns, ‘Descriptions of eight new Philippine birds with notes on other species new to the islands’, *Proceedings of the Biological Society of Washington*, 18 (1905) 83–88. 経済鳥類学課は、1905年に生物探査局 Bureau of Biological Survey と改名され、1940年に内務省管轄の合衆国魚類野生生物局 (United States Fish and Wildlife Service) へと再編された。

<sup>44</sup> Edgar E. Mearns, ‘Descriptions of new genera and species of mammals from the Philippine islands’, *Proceedings of the United States National Museum*, 28 (1905), 425–460.

<sup>45</sup> 上記注35で言及した、1906年のマリンダン山への遠征もウッドの積極的な支援のもとで行われた。

<sup>46</sup> Birds of Apo expedition, [f. 5].

表 3 : マーンズが発見、命名したアボ山の新種鳥類の一覧

No.	記載時の学名 (1)	新種・新亜種 (2)	英名 (3)	和名 (3)	現在の学名 (3)	備考
1	<i>Leonardina woodi</i>	新属新種	Bagobo Babbler	アボチメドリ	<i>Leonardina woodi</i> Meams, 1905	
2	<i>Pseudotharrhaleus griseipectus</i>	新種	Long-tailed Bush-Warbler	オナガオウギセツカ	<i>Locustella caudata unicolor</i> Hartert, 1904	既記載
3	<i>Brachypteryx mindanensis</i>	新種	White-browed Shortwing ( mindanensis)	コバネヒタキ	<i>Brachypteryx montana mindanensis</i> Meams, 1905	
4	<i>Macronus mindanensis montanus</i>	新種	Brown Tit-Babbler	コシミノチメドリの亜種	<i>Macronus striaticeps mindanensis</i> , Steere, 1890	既記載
5	<i>Aethopyga boltoni</i>	新種	Apo Sunbird	アボタイヨウチヨウ	<i>Aethopyga bolton</i> Meams, 1905	
6	<i>Cyrtostomus dinagatensis</i>	新種	Olive-backed Sunbird	キハラタイヨウチヨウ	<i>Cimnmyris jugularis aurora</i> Tweeddale, 1878	既記載
7	<i>Anitreptes cagayanensis</i>	新種	Plain-throated Sunbird (cagayanensis)	チャノドコバシタイヨウチヨウ	<i>Anitreptes malacensis cagayanensis</i> Meams, 1905	
8	<i>Mertula kelleri</i>	新種	Island Thrush (Keller's)	タイワンツグミ (kelleri)	<i>Turdus poliocephalus kelleri</i> Meams, 1905	
9	<i>Gerygone rhizophorae</i>	新種	Golden-bellied Gerygone (rhizophorae)	マレーシアセンニョムシクイ	<i>Gerygone sulphurea rhizophorae</i> Meams, 1905	
10	<i>Muscicapula montigena</i>	新種	Bundok Flycatcher (montigena)	ルンヤマビタキ	<i>Ficedula luzoniensis montigena</i> Meams, 1905	
11	<i>Pardaliparus elegans mindanensis</i>	新亜種	Elegant Tit (mindanensis)	シラボシガラ	<i>Pardaliparus elegans mindanensis</i> Meams, 1905	
12	<i>Turnix suluensis</i>	新種	Small Buttonquail (suluensis)	ヒメフウズラ	<i>Turnix sylvaticus suluensis</i> Meams, 1905	
13	<i>Muscadivora langhornei</i>	新種	Grey Imperial-Pigeon (langhornei)	ハイイロミカドバト	<i>Ducula pickeringii langhornei</i> Meams, 1905	
14	<i>Caprimulgus affinis mindanensis</i>	新亜種	Savanna Nightjar (mindanensis)	シロアゴヨタカ	<i>Caprimulgus affinis mindanensis</i> Meams, 1905	
15	<i>Phyllergates heterolaemus</i>	新種	Rufous-headed Tailorbird	ミンダナオサイホウチヨウ	<i>Phyllergates heterolaemus</i> Meams, 1905	
16	<i>Cephalophonus suluensis</i>	新種	Long-tailed Shrike (suluensis)	タカサゴモズ	<i>Lanius schach suluensis</i> Meams, 1905	
17	<i>Hyloterpe apoensis</i>	新種	Yellow-bellied Whistler (apoensis)	フイリピンモズヒタキ	<i>Pachycephala philippinensis apoensis</i> Meams, 1905	
18	<i>Dicaeum davao</i>	新種	Olive-capped Flowerpecker	ハシナガハナドリ	<i>Dicaeum nigrilore</i> Hartert, 1904	既記載
19	<i>Lamprocorax todayensis</i>	新種	Short-tailed Starling (todayensis)	コミドリカラスモドキ	<i>Aplonis minor todayensis</i> Meams, 1905	

出典 : Edgar A. Meams, 'Descriptions of a new genus and eleven new species of Philippine birds', *Proceedings of the Biological Society of Washington*, 18 (1905) 1-8; Edgard A. Meams, 'Descriptions of eight new Philippine birds with notes on other species new to the islands', *Proceedings of the Biological Society of Washington*, 18 (1905) 83-88.

注 : (1) 論文発表時に記載された学名。

(2) 発表時点での分類による。

(3) 英名、和名、現在の学名および発表時の学名との照合確認は、Avibase: The World Bird Database に依拠する。和名と英名は、主にタイブ種のもの。発表当時は種に分類されていたものの、現在は亜種であるものが多い。



仮の英名があたえられ、その後ろに個体別の識別番号とバゴボ名が記載された<sup>47</sup>。

そして、標高による分布範囲を記載した史料 C において、標本 13689 は初めて *Leonardina woodi* と記載された。この段階でも、他の鳥類と同じように、バゴボ名が付記されている。さらに、「範囲：チューダヤ 4000 フィートで採集された標本のみ。しかし、鳴き声はキャンプ・グッドフェロー 6000 フィートでも、ときおり聞こえた」とのメモが加えられた<sup>48</sup>。この史料 C からは、学名とバゴボ名が抽出され、史料 D に転載された<sup>49</sup>。記載論文では、形態学的特徴が羅列されるが、「脚と爪、鉛色」、「嘴、黒」という史料 A の段階で書き込まれたメモは、そのまま転載された。また、バゴボ名も併記され、マーンズが国立自然史博物館に寄贈したタイプ標本の新旧の識別番号が併記された<sup>50</sup>。

標本 13689 の記載をめぐるひとつひとつの変化は、些末なことのように見えるかもしれない。しかし、それは自然物をめぐるローカルな知識・情報が、普遍性を志向する分類学の知の体系にどのように編纂されていったのか、またそれにより、体系そのものがどのように作り替えられていったのかを示す重要な痕跡である。これを科学知の生産のひとつのあり方として捉えるならば、それを取り巻く文化的な慣習と規範、行動様式も同時に見えてくる。その最たるものは、マーンズが自身の上官に新属新種の名を奉じたように、献名という慣習に見いだすことができる。次節では、再びグッドフェローに焦点を戻し、新種の発見と命名をめぐる競合関係を取りあげ、文化史の側面から鳥類採集の実態を考察する。

### 3. グッドフェローによる第 2 回アポ山遠征（1905 年 12 月）

グッドフェローは、1904 年 11 月に再びミンダナオ島へと向かった。遠征費用はジョンストンが負担した。出発直前にジョンストンに送った手紙では、ジョンストンの名を冠することになる新種鳥類をさらに発見し、ジョンストンが気に入ったアポインコも捕獲したいと抱負を記している<sup>51</sup>。グッドフェローが再びアポ山で鳥類採集を行ったとき、マーンズは先述のとおり、体調不良のためミンダナオ島を離れ、サンフランシスコの陸軍病院で療養した後、ワシントンへと移動して国立自然史博物館で標本の同定に従事していた。マーンズの記載論文が発表されたのは 1905 年の 1 月から 2 月にかけてのことだったため、グッドフェローはマーンズが行っ

<sup>47</sup> Birds of Apo expedition, [f. 7].

<sup>48</sup> Birds of Apo expedition, [f. 13].

<sup>49</sup> Birds of Apo expedition, [f. 18].

<sup>50</sup> Mearns, 'Descriptions of a new genus and eleven new species of Philippine birds', 2. 後述するように、マーンズの標本は国立自然史博物館で整理された際に、新たに識別番号が振り直された。旧番号 13689 は、新番号 192260 となった。

<sup>51</sup> NHML, TR/1/1/25/176, Goodefellow to Johnstone, 7 Nov. 1904.

たアポ山遠征のことを知らないまま、現地に向かったことになる。

ミンダナオ島に到着してからそれを知ったグッドフェローは、とても焦ったようである。1905年3月、ダバオからハータートに送った手紙の中で、新種発見が危うくなりとても焦ったと、そのときの心情を吐露している。グッドフェローはまた、マーンズの遠征に同行した現地在住の人物から、マーンズがその人物に送った手紙を見せてもらったと報告している。それによると、マーンズはグッドフェローが再びアポ山を訪れる予定を察知していた。その文面からは、グッドフェローとマーンズが互いに相手のことをライバルとして意識していたことがわかる。背景には、当時、種の命名における最重要原則のひとつとして改めて確認された、先取権の原則（原理）があった。これは最初に適格と判断された学名が、適格名として使用されるという原則である（例外もある）。したがって、採集家の視点からは新種と思われる種を発見し、その記載を自ら書くか、もしくは他者に書いてもらうことが重要であった。マーンズがグッドフェローの遠征を知っていたように、グッドフェローもまたマーンズの動向を探っていた。グッドフェローは、マーンズが1新属を含む4種の新種を発見したとハータートに報告している<sup>52</sup>。この新属とは、先述のアポチメドリのことだろう。

一方、マーンズは自分が新種と思った種が、すでにグッドフェローが前回の遠征で発見していた種だと知り、苛立ったようだと記されている。この種が何か明記されていないが、表1のどれかだと思われる。マーンズはこのように既記載種を除いたうえで、19種を新種として記載したが、そのうち4種については既記載種であることが判明した。その4種のうち2種は、ハータートが先に記載した種であり、ハータートの命名が有効な学名とされた。たとえば、マーンズは表3のオナガオウギセッカ（No. 2）を、*Pseudotharrhaleus griseipectus*（種小名は「灰色の胸」の意）と命名したが、その種はすでにハータートが *Pseudotharrhaleus unicolor*（種小名は「単色」の意）と命名していたため、後者が有効とされた<sup>53</sup>。ハータートの論文が刊行されたのが1904年4月28日、マーンズの論文が刊行されたのが1905年1月20日であり、約半年の差であった。

マーンズのハシナガハナドリ（No. 18）も、すでにハータートが命名していた種だった。ハータートの論文刊行日が1904年11月1日、マーンズの論文刊行日が1905年2月21日であり、ハータートの方が約3か月早かったことになる。もちろん、そのことを知らないマーンズは、自分の後からイギリス人がハシナガハナドリの記載したとしても、自分の記載の方が先であるという優越感に浸っていたと、グッドフェローはハータートに報告している。その文面には、グッドフェローのマーンズへの対抗意識が滲み出ている。

<sup>52</sup> 実際には表3のように19種であった。

<sup>53</sup> なお、現在の学名は *Locustella caudata unicolor* Hartert, 1904 で亜種に分類される。

タイワンツグミ (No. 8) の事例も、ふたりの競合関係を示している。グッドフェローによれば、すでに初回遠征時に発見し、ハータートに送ったにもかかわらず、ハータートはそれを独立した種と認めず、したがって記載をしなかった。しかし、マーンズはそれを新種として記載し、遠征に同伴した兵士ケラーに献名した。それについてマーンズは、イギリス人が記載論文を書いていなければ、自分がその鳥を命名すると言っていたようである。この言葉にもグッドフェローは刺激されたようで、「そんなありふれた種を私が見過ごすことなどあるはずもないだろう」と対抗意識を露わにし、ハータートが記載しなかったことを悔やんだ。

もちろん記載論文が刊行されれば、採集された場所が明らかにされるために、採集家の間に情報が行き渡るのは当然である。しかし、鳥類採集に適した具体的な場所などの詳細な情報は、採集家はできるだけ秘匿したいと考えていた。たとえば、グッドフェローはアポ山遠征から帰国した後、台湾内陸部の玉山周辺に遠征し、そこでミカドキジを含む 12 の新種を発見した。記載したのは、自然史博物館のオグルヴィー＝グラントである。同じ頃ロスチャイルドも台湾高地へ日本人の採集家を派遣していた。それを知ったグッドフェローは、鳥類採集に適した場所を知っているが、他の採集家を利することになるかもしれないので、あえてそれがどこかは記さないとオグルヴィー＝グラントに告げた<sup>54</sup>。

とはいえ、情報を完全に秘匿することは不可能であった。採集活動を支えた現地協力者を通して、採集家は間接的に情報を共有していたからである。たとえば、マーンズがアポ山で野営地を設営したキャンプ・グッドフェローは、グッドフェローが初回遠征時に野営地とし、採集活動に適した場所と判断された場所だろう。そうした情報は、たとえグッドフェロー本人が秘匿しようとしても、案内人として同行したバゴボの現地人を介して、他の採集家の知るところとなるものだった。したがって、採集家はむしろ現地協力者を通してライバルの情報を得ることも可能だった。グッドフェローは、マーンズの遠征に同行した現地人を雇い、新たに鳥を採集すると、それがすでにマーンズの手の中にあるかどうか確認しようとした。

このように鳥類採集の実態に迫ろうとすると、採集活動のロジスティクスを担った現地協力者の存在を見過ごすことはできない。かれらは、マーンズの場合であれば従軍旅程の記録に、グッドフェローの場合であれば書簡の中に、採集活動の要となる存在として登場する。しかし、記載論文にはその論文としての性格上、現地協力者が登場することはない。このことは、採集活動から記載論文に至るまでの過程で、どのように情報が処理され、何が知識として標準化され、何がそこから排除されたのかという視点から、今一度捉え直すことができる。現地協力者の非在化、不可視化は、定量化された情報と詳細な記述がもたらす圧倒的な鳥の存在感と、対

---

<sup>54</sup> NHML, DF/230/23/251, Goodfellow to Oglvie-Grant, 25 Nov. 1906.

表 4 : グッドフェローが発見しオグルヴァイ=グラントが命名したアボ山の新種鳥類の一覧

No.	記載時の学名 (1)	新種・新亜種(2)	英名 (3)	和名 (3)	現在の学名 (3)	備考
1	<i>Ptilocolpa mindanensis</i>	新種	Spotted Imperial-Pigeon (mindanensis)	ウロコミカドバト	<i>Ducula carola mindanensis</i> Oglvie-Grant, 1905	
2	<i>Chrysocolaptes lucidus montanus</i>	新亜種	Buff-spotted Flameback (montanus)	コガネガラ	<i>Chrysocolaptes lucidus montanus</i> Oglvie-Grant, 1905	
3	<i>Ceyx goodfellowi</i>	新種	Dimorphic Dwarf-Kingfisher (Goodfellow's)	ミツユビカワセミ	<i>Ceyx margarethae goodfellowi</i> Oglvie-Grant, 1905	
4	<i>Bolbopsittacus mindanensis</i>	新種	Guaiabero (mindanensis)	バンジロウインコ	<i>Bolbopsittacus lunulatus mindanensis</i> Oglvie-Grant, 1905	既記載
5	<i>Rhinomyias goodfellowi</i>	新種	Slaty-backed Jungle-Flycatcher	マミジロミツリンヒタタキ	<i>Lauriella goodfellowi</i> Oglvie-Grant, 1905	
6	<i>Pericrocotus johnstoniae</i>	新種	Scarlet Minivet (Mindanao)	ヒイロサンショウウクイ	<i>Pericrocotus spectosus johnstoniae</i> Oglvie-Grant, 1905	
7	<i>Pseudopnyx mindanensis</i>	新種	Philippine Eagle-Owl (mindanensis)	フィリピンワシミミズク	<i>Bubo philippensis mindanensis</i> Oglvie-Grant, 1906	
8	<i>Sarcops melanonotus</i>	新種	Coleto (melanonotus)	メガネムクドリ	<i>Sarcops calvus melanonotus</i> Oglvie-Grant, 1906	

出典 : *Bulletin of the British Ornithologists' Club*, 16 (1905) 16-19, 99-100.

注 : (1) 論文刊行時に記載された学名。

(2) 発表時点での分類による。

(3) 英名、和名、現在の学名および発表時の学名との照合確認は、Avibase: The World Bird Database に依拠する。和名と英名は、主にタイプ種のもの。発表当時は種に分類されていたものの、現在は亜種であるものが多い。

をなしている。

グッドフェローは、1905年9月初旬にイギリスに帰国した。帰国後、オグルヴィ＝グラントに手紙を送り、採集した標本は約400点で、新種も相当数含まれていると伝えた<sup>55</sup>。この手紙は、グッドフェローが持ち帰った標本をめぐって、博物館の間で争奪戦が起きそうだったことを示唆している。オグルヴィ＝グラントもハータートも、ともに先買権 (first refusal) を欲した。この用語は、様々な商取引に用いられるが、ここでは最初に標本売却のオファーを受ける権利のことである。また、アメリカ国立自然史博物館も購入の意欲を持っていた。グッドフェローは、400点の標本には200ポンドの価値があるということ、また、先買権が欲しければマリオン・ジョンストンにそう伝えるべきだとオグルヴィ＝グラントに助言した。グッドフェローの遠征の費用を負担したジョンストンが、最終的な決定権を持っていたのかもしれない。

いずれにせよグッドフェローの第2回アポ山遠征の成果は、オグルヴィ＝グラントが所属するロンドン自然史博物館が購入した。全部で124種あり、そのうち少なくとも19種は博物館のコレクションに初めて加わるものだった<sup>56</sup>。新種を記載したのは、もちろん、オグルヴィ＝グラントである (表4)。このうち *Ceyx goodfellowi* (No. 3) は、まだマーンズには見つけ出されていないと、グッドフェローが現地協力者に教えてもらった種のことだろう。マミジロミツリンヒタキ (No. 5) は、グッドフェローに献名され、種小名が *goodfellowi* とされた (図4)。*Pericrocotus johnstoniae* (No. 6) は、マリオン・ジョンストンに献名された。先述のとおり、ジョンストンの鳥類採集支援者としての役割を高く評価したものであることは、グッドフェロー、オグルヴィ＝グラント、ジョンストンの三者の関係をめぐる前後の文脈より明らかである。オグルヴィ＝



図4 マミジロミツリンヒタキ

*Vauriella goodfellowi* Oglvie-Grant, 1906

出典： *Ibis*, 8th ser. vol. 6 (1906) plate VIII.

<sup>55</sup> NHML, DF/230/23/239, Goodfellow to Oglvie-Grant, 8 Sep. 1905.

<sup>56</sup> W. R. Oglvie-Grant, 'On the Birds collected by Mr. Walter Goodfellow on the volcano of Apo and in its vicinity, in southeast Mindanao, Philippine Islands,' *Ibid*, 8th ser. vol. 6 (1906) 465-505.

グラントによる記載論文が刊行されたのは、1905年11月1日である<sup>57</sup>。その時すでにイギリスを離れていたグッドフェローは、次の遠征地である台湾に到着してからそのことを知った。安平からオグルヴィー＝グラントに送った手紙の中で、献名に対して謝辞を記している。そうしたやり取りは、フィールドへ赴く採集家と、博物館で研究に従事する鳥類学者が、互いの役割を認識し、互酬関係を確認するプロトコルでもあった<sup>58</sup>。

## おわりに

本稿では、20世紀初頭のフィリピン南部、とくにミンダナオ島で行われた鳥類採集の実態と、それが鳥類学や分類命名法の展開に与えた影響を考察してきた。グッドフェローとマーンズによって行われたアボ山遠征によって、フィリピン諸島における新種発見は、ひとつのピークを迎えたと言える。同時期には、フィリピン諸島の他の地域でも採集活動が繰り返されていた。それによって、フィリピン諸島における鳥類分布の全体像を構想することができるようになったのである。1906年、フィリピン科学局のリチャード・マクレガーとディーン・ウースターによって、『フィリピン鳥類目録』が刊行された。同書は、フィリピン諸島を鳥類分布の観点から12の地域に分割し、ミンダナオ島と周縁の諸島をその一地域に位置づけた<sup>59</sup>。これを可能にしたのが、マーンズによる網羅的な分布調査であった。同書序文には、情報を提供してくれたマーンズへの謝辞が明記されている<sup>60</sup>。スミソニアン博物館フィールドブック・コレクションの中には、生息分布に関する情報がまとめられた‘List of birds observed in the Philippine Islands by Mearns and data on location and species of birds’という、手稿史料が残されている。さらに1909年、マクレガーはフィリピン科学局より『フィリピン鳥類便覧』を刊行した。マクレガー自身も携わった『フィリピン鳥類目録』のように、鳥類学の分類体系に従いフィリピンの鳥類の種名を一覧にした目録 (hand-list) は、すでに度々出版されてきたが、種の定義となる記載を編纂した便覧 (manual) は、同書が初である。序文によると、主な研究資料はフィリピン科学局が収集した8000点以上の標本であった。もちろん、マクレガー自身も、その膨大なコレクションの形成に寄与した収集家のひとりである<sup>61</sup>。

マクレガーはまた、同書の刊行がフィリピン諸島の鳥類研究の進展だけでなく、鳥類の分類

<sup>57</sup> *BBOC*, 16 (1905) 16–19.

<sup>58</sup> NHML, DF ZOO/230/23/249, Goodfellow to Oglvie-Grant, 21 Dec. 1905.

<sup>59</sup> Richard C. McGregor and Dean C. Worcester, *A hand-list of the birds of the Philippine islands* (Manila: Bureau of Printing, 1906), p. 5.

<sup>60</sup> McGregor and Worcester, *A hand-list of the birds*, p. 6. 一方、マーンズはミンダナオオオサンショウクイ (*Malindangia mcgregori* Mearns, 1907) をマクレガーに献名している。

<sup>61</sup> Richard McGregor, *A manual of Philippine birds* (Manila: Bureau of Printing, 1909), pp. 2–3; Joseph Grinnell, ‘In memoriam: Richard C. McGregor ornithologist of the Philippines’, *Auk*, 55 (1938) 163–175.

体系の発展を示すものと考えていた。同書は、アメリカ鳥類学者連合が推進しようとした三命名法の標準化に寄与した。1884年、アメリカ鳥類学者連合は亜種名を含んだ三命名法を正式に採用しており、『フィリピン鳥類便覧』刊行の前年には、その改訂版も刊行されていた。マクレガーはこれに従い便覧を作成したことを明記し、過去半世紀の間の分類命名法の発展に読者の注意を向けようとした。しかし、三命名法は1901年の第5回国際動物学会において公式に認定されたものの、依然として反対の意見も強かった<sup>62</sup>。オグルヴィ＝グラントも、三命名法に消極的な鳥類学者のひとりであった。グラントだけでなく、ロスチャイルドやハータートを除き、イギリスの鳥類学者も三命名法の標準化に懐疑的であった<sup>63</sup>。なお、三命名法の導入とその標準化は、それまで種と思われていた分類群を、新たに亜種の分類群とする動きをもたらした。たとえば、本稿の表1、表2、表4には、合計31種4亜種が掲載されているが、これは記載当時のもので、現在の分類に従うと10種25亜種となる。

このような分類命名法の展開は、集中的な鳥類採集が行われた背景にある、アメリカによるフィリピン諸島の植民地支配の進展と無関係ではない。ルソン島など比較的早くから鳥類採集や分布調査が行われてきた地域では、種の記載が進んでいた。そうした北部で発見された種と比較のうえで、南部で新たに発見された鳥類が新種として記載されてきたのである。しかし、三命名法が導入されることにより、そうした地域間の違いは多くの場合、種の次元ではなく、亜種の次元での違いとして扱われるようになった。表3のオナガオウギセッカ (No.2) も、このような理由から分類学上の地位が変化した種／亜種ひとつである。マーンズとグッドフェローの事例は、帝国の最前線が鳥類採集の最前線でもあったことを、改めて想起させる。マーンズはまさにモロの掃討作成に参加しながら、鳥類採集に従事した。グッドフェローも銃声を耳にし、「インクのように黒くなった泥水」をすすりながら、文字通り命がけで鳥類採集を行った<sup>64</sup>。

何がかれらを鳥類採集に駆り立てたのか。限られた史料をもとに解釈するしかない。研究者や採集者の間では新種の発見と命名に学術的意義が置かれ、献名という慣習が互いの人間関係を確認するプロトコルとして機能していた。そうした人的紐帯は、同じ価値観を共有し、さらに強化する「感情の共同体」を形成したと言えるかもしれない<sup>65</sup>。グッドフェローの手紙に示された、新種発見への執念、献名されたことへの感謝の念、マーンズに対する敵愾心は、名誉・

<sup>62</sup> Kohler, *All creatures*, pp. 261–263.

<sup>63</sup> Kristin Johnson, *Ordering nature: Karl Jordan and the naturalist tradition* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 2012), pp. 59–60; 『鳥』4 (1925) 332.

<sup>64</sup> NHML, DF/230/23/251, Goodfellow to Oglvie-Grant, 25 Nov. 1906.

<sup>65</sup> 感情史の視点からの分析については、以下の口頭報告と本稿の議論に基づき別稿を期したい。Takashi Ito, ‘The Honour of naming a new species: emotional communities of naturalists in the early twentieth century’, Colloquium, Centre for the History of Emotions, Max Planck Institute for Human Development, November 2019.

荣誉という感情を軸として理解することができる。たとえば、英語では ‘*Goodfellowia miranda* was named in honour of Goodfellow’ という表現が用いられるが、その honour は儀礼的なレトリック以上のものを持っていた。種を記載するということは、記載者としての自身の功績を、ときに他者への敬意、愛情、感謝とともに、その名において記録し残す行為だったからである。